

「生活者の理解」を推進する地域参加を通じた学生の学び

| | |
|-----|----------------------------------------------------------------------------------|
| 著者 | 関谷 伸一, 吉山 直樹, 渡辺 弘之, 杉田 収, 中野 正春, 橋本 明浩, 山本 淳子, 岡村 典子, 水澤 久恵, 徐 淑子, 丸田 健一郎 |
| 雑誌名 | 看護研究交流センター年報 |
| 巻 | 19 |
| ページ | 13-14 |
| 発行年 | 2008-10-31 |
| URL | http://hdl.handle.net/10631/417 |

「生活者の理解」を推進する地域参加を通じた学生の学び

関谷伸一¹⁾，吉山直樹¹⁾，渡辺弘之¹⁾，杉田 収¹⁾，中野正春¹⁾，橋本明浩¹⁾，
山本淳子²⁾，岡村典子¹⁾，水澤久恵¹⁾，徐 淑子¹⁾，丸田健一郎³⁾

1) 新潟県立看護大学，2) 新潟経営大学，3) 上越市安塚区総合事務所

キーワード：ふれあい実習，地域の生活，民泊，発表交流会，看護教育

目的

新潟県立看護大学では、「生活」を看護教育における重要な概念と位置付け、「生活者」に対する理解と洞察力を深めることを目的とした教育課程を展開してきた。中でも、学生が大学生生活の早期から地域社会の人々と交流することを図った「ふれあい実習」を1年次に開講し、開学以来実施してきている。学生が地域社会に参加し、地域住民と交流し、自らが地域の生活者となり、体験と学びの成果を発表する、という体験を通して地域の日常生活の成り立ちを理解し、地域の生活の基盤となる価値に気づくことが本実習の目的であるが、このような学生の学びを検証し、今後の実習のあり方を検討することを本研究の目的とした。

研究方法

平成19年度の本実習について、質問紙によるアンケート調査を行った。調査対象は、①「ふれあい実習」に関われた地域の人々、②本学の実習担当教員、である。また、学生の学びに関しては学生自身が提出した「自己評価表」の内容を質的に分析した。分析にあたっては、発表交流会を含めたふれあい実習全体における学びや感想に視点を置き、類似点・相違点を検討したうえでカテゴリー抽出を行った。

本研究は、新潟県立看護大学倫理委員会の承認を受けて行った。

結果

1. 地域の人々へのアンケート調査結果

(1) 発表交流会でのアンケート調査

発表交流会に参加した地域の人々の総数は正確に把握されていないが、会場でのアンケート用紙の回収は34件であった。「良かった」、「感心した」などの肯定的回答が41件（複数回答）、また励ましの言葉や期待の回答が19件であった。

(2) 民泊受入等、地区関係者へのアンケート調査

本実習にかかわった人々38名中34名から回答を得た。アンケート内容は、①「ふれあい実習」について、②民泊について、③発表交流会について、全26項目であった。肯定的回答は「地域の文化や暮らしを学生に伝えることができた」が20件、また「学生との交流ができて良かった」が25件あった。発表交流会に参加した26名中、交流会の内容が良かった22名、どちらとも言えない3名であった。

2. 実習担当教員へのアンケート調査結果

担当教員12名のうち10名が回答し、そのうち9名が本実習に満足と答え、「地域の活性化に役立った」と感じ、「学生の発表で地元のことをより知ることができた」と答えた。

3. 学生「自己評価表」の質的分析

調査の同意を得られた学生は88名中80名であった。学生が提出した「自己評価表」の記載文から、8つのカテゴリーと54のサブカテゴリーが抽出された(表1)。

表1. 学生の「自己評価表」から抽出されたカテゴリーとサブカテゴリーの例

| 抽出されたカテゴリー | → | 1. のサブカテゴリー |
|-------------------|---|-----------------|
| 1. 地域の人々との交流 | | ①幅広い交流対象 |
| 2. 地域の特徴を知る | | ②コミュニケーションの過程 |
| 3. 人々の日常生活の成り立ち | | ③人々の温かさと交流の楽しさ |
| 4. 地域特性が生活に与える影響 | | ④場の共有と同一体験 |
| 5. 価値観の多様性 | | ⑤様々な観点から住民の話聞く |
| 6. 看護の対象 | | ⑥体験の意味づけ |
| 7. 協力し合いながらの学びと成果 | | ⑦積極的な関わり |
| 8. 感動と自己達成の喜び | | ⑧実習への自己の関わり方に問題 |

これらの内容から、学生が幅広い交流対象に恵まれ、自然体で交流できるようになり、民泊家族と同一体験をしながら地域の生活を理解し、さらには自己との関わり方にも気づいていたことが明らかになった。また学生は、地域の特性や人々の生活の成り立ちに気づき、また自己の生い立ちと比較しながら価値観の多様性に気づくなど、多くの学びを得ていた。実習の最後には、発表交流会に向けての共同作業による準備とプレゼンテーションによって、本実習に対する達成感を味わっていた。

考察

本実習全般のあり方について、学生、教員、地域の人々ともに肯定的回答が多く、学生の学習目的もほぼ達成されたといえる。したがって、本実習の体験を通して、「生活者」を捉えろといった看護を学ぶ上での素地が培われたと考えられる。同様の評価は他の看護系大学においても得られている(村本, 2004; 松下ら, 2008)。

また、「実習に対する自己のかかわり方に問題を感じる」、「さらに深い学習の必要性を感じた」学生がいたことは、自学自習や自己決定の力を身につけていくうえでの有効性を示しているといえる。今後、本実習に学生の自主性を重んじたプログラムを加え、学生の努力を認めながら指導することによって、より一層の教育効果が期待できるものと考えられる。

結論

開学当初から実施している1年次の「ふれあい実習」は、「生活者の理解」を推進し、学生自身の自己への気づきも得られるなど、看護学教育にとって有効な実習であると評価できた。

文献

- ・松下延子, 神庭純子, 小林貴子, 他7名(2008): 4年生大学看護基礎教育課程の1年次「ふれあい実習」の教育効果(2報), 岐阜医療科学大学紀要, 2号, 115-122.
- ・村本淳子(2004): 1年次からの地域に根ざした段階的看護学実習—特に第I段階: 「ふれあい実習」に焦点を当てて—, Quality Nursing, 10(1), 79-83.